

政治思想学会会報

JCSPT Newsletter

第18号
2004年7月

目次

新代表理事の挨拶

歴史研究としての政治思想史・政治理論

小野 紀明 1

書評

「歴史」と相渉る、開かれた主体形成の倫理へ

—— 孫歌『アジアを語ることのジレンマ——知の共同空間を求めて』を読む

伊藤 貴之 2

学会動向

日韓政治思想学会第3回共同学術会議 9

CSPT2004年度大会について

杉田 敦 10

2005年度研究会「自由論題」

報告者募集のお知らせ 15

理事会記録 16

会務報告 19

お知らせ 20

歴史研究としての政治思想史・政治理論

代表理事 小野紀明（京都大学）

図らずも私が代表理事に指名されるにあたっては、理事会全体を若返らせ、若手研究者の意向を学会運営により反映させたいという加藤節前代表理事ならびに理事会の強いご意向が働いていたように思われる。若手の育成は本学会発足時から学会の重要な目的として位置づけられていたが、実際11年を経過した現在、研究会における自由論題や年報における公募論文は、質・量ともに着実に高まっている。代表理事としての私の任務は、まず何よりもこの傾向を一層伸長させることにあると考える。これに加えて、学会規約にも謳われているように、内外の研究者が相互に啓発する場として本学会の発展に努める所存であることは言うまでもない。

その上で、代表理事として若干の抱負を申し述べたいと思う。加藤前代表理事は着任の際の抱負として、実証的政治学との間にある緊張関係を自覚し、現実に対する思想史研究の意義を再認識する必要性を説いておられる。この点に関しては私も満腔の賛意を表したいと考える。ここで私が提起したい点は、今度は政治思想史学内部の緊張関係である。政治思想史と現代政治理論は同じ研究者が管轄する対象領域であり、両者を区別して考えること自体が誤りであるのかもしれない。しかし、多くの研究者はいずれかを主たる研究領域にしており、また両者はかなり異なる態度を研究者に強いることは事実である。不勉強にもこれまで専ら政治思想史研究に携わってきた私自身、本務校においてこの4月から現代の規範理論に関する授業を大学院で担当することになり、過去に沈潜し当時の文脈に即して可能な限り思想家の真意を解明しようとする政治思想史と、現実に対する関心と自らの研究の現代的意義を常に自覚することを要求される規範理論の相違を実感し、両者を架橋することに苦勞している。しかしながら、両者はあくまでも車の両輪であり、現在を相対化する歴史意識を欠いた政治理論も、現実に対する問題意識が希薄な政治思想史も、ともに望ましいものではないであろう。かつて思想史を専門とする研究者が主流であった政治思想史学の中で規範理論の占める比率が確実に上昇し、その研究に従事する会員の数も増大している。その意味で、今後の政治思想学会の果たすべき重要な役割は、両者の実り豊かな対話の場を提供することにあると考える次第である。

このことに関連して第二に申し述べたい点は、過去から継承された知の保存と未来を展望する知の創出との間に存する緊張関係という問題である。これまた受験生の減少や法人化といった問題に促された大学改革の真っ直中にいる私自身が、日々経験している問題である。上で述べた理由からも、本来政治思想史・政治理論の研究者は、まさにこの緊張を真正面から受け止めることを自らに課さざるをえない立場に置かれている。私が危惧するのは、社会一般にも、否、研究者の内部にすら過去を過去として研究するという基本的態度が批判の対象になる風潮がともすれば見られることである。このようなときにあってこそ、政治思想史・政治理論の専門家集団である本学会は、世の一般的風潮と一線を画して毅然とした態度を持すべきであると考え。私は、けっして学際的研究や実務との架橋を否定しようとするものではない。しかし、それらを十分に尊重しつつも、政治思想史・政治理論がFachwissenschaftとして今後もひとつのまとまりを維持し、そのために本学会が演じる役割が大きいことを強調したいと考えるものである。

私の見解に対する会員諸氏の忌憚のないご批判を期待するとともに、本学会の発展のためのご協力をお願い申し上げる次第である。

「歴史」と相渉る、開かれた主体形成の倫理へ

—— 孫歌『アジアを語ることのジレンマ —— 知の共同空間を求めて』を読む

伊 東 貴 之 (武蔵大学)

孫歌氏の初の日本語(邦訳)による論文集である本書は、分量的に見れば、些か小振りとも映ろうが、日中両国の思想界や学術界において、ある意味で画期的な、あるいは象徴的な意義を担って登場し、満を持して公刊されたものと評することが出来よう(2002年6月25日発行、岩波書店、256頁)。

既に周知の向きもあろうが、まずは、本書の著者、孫歌(そんか; スン・グー Sun Ge)氏について、簡単な紹介を試みておこう。

彼女は、中国吉林省長春市の生まれで、現在、中国社会科学院文学研究所研究員の任にある。初め中国文学および比較文学の研究者として出発し、この方面の著作としても、既に『求錯集』(北京・三聯書店、1998年)、『国外中国古典戯曲研究』(陳燕谷との共著、上海・江蘇教育出版社、2000年)などがあるが、近年では、取り分け日本思想史の分野の研究に専心し、竹内好や丸山眞男らの言説を手掛かりに、近代日本における知識人の役割やその命運、彼らのアジアや中国へ関わる思想的視座などについて、きわめて鋭角的な考察を重ねている。なお、既にこの方面の日本語による論攷としても、竹内好をひとつのプリズムとして、丸山思想史学を捉え返した「丸山眞男におけるフィクションの視座」(『思想』888号、1998年6月号)が存する。続いて、これら近代日本の思想家や研究者らの思惟への共感や沈潜とも連動しつつ、より広く現代の中国や日本にとってのアジア、ないしは東アジアといった問題系(プロブレマティック)への真摯な批判的考察を展開している。本書にもその序文の邦訳が収められた大著『亞洲意味着什麼(アジアは何を意味するのか?) —— 文化間的「日本」』(台北・巨流図書公司、2001年)は、そうした一連の思索の成果であり、別途、紹介や翻訳が望まれるところである。更には、ここ

数年来、主として雑誌『世界』に掲載され、同じく本書に収められている、日中戦争をめぐる両国の歴史認識の齟齬や軋轢の所以を剔抉した、一見、時事的、状況論的でありながら、すぐれて本質的で原理的な考察を含む論攷により、日本の論壇にも相応の波紋を投げかけたことは、記憶に新しい。その他、やはり本書中でも論及されている、日中両国の広汎な知識人を巻き込んだ「知の共同体」と名付けられた運動においても、本書の訳者の一人である溝口雄三氏らとともに、中心的な役割を果たした。

こうした氏の学問的な履歴からも明らかなように、本書は、特に近年の氏の学術的、思想的な営為や実践的な活動から齎された果実とも言うべく、それらと密接不可分の関係にある。具体的には、ほぼ世紀の交を跨いで、いくつかの雑誌に掲載された論攷や批評的エッセーの日本語訳から構成される(訳者は、丸川哲史、坂井洋史、溝口由己、王智新、溝口雄三の各氏である)。

以下、本書の全体の構成とともに、所収の論攷を、初出誌を含めて紹介したい。

I

「アジアという思考空間」

『亞洲意味着什麼 —— 文化間的「日本」』導言、台湾巨流図書公司、2001年10月。

II

「日中戦争 —— 感情と記憶の構図」(「実話如何実説」)

『読書』2000年3月号、『世界』2000年4月号。

「思想としての「東史郎現象」 —— 理論と現実の間で」(在理論思考与現実行動之間)

『読書』2000年11月号、『世界』2001年2月号。

「近代史に向き合う倫理的責任」(直面相互纏繞の歴史)

『読書』2001年5月号、『世界』2001年6月号。

「グローバリゼーションと文化的差異——国境を越えた知の状況に対する考察」(全球化与文化差异：對於跨文化知識狀況的思考)

『東方文化』(広州)2001年2月号、『世界』2001年11月(別冊)。

Ⅲ

「歴史を生き直すこと」(再生於現在的歴史)

『読書』1997年7月号、『批判 植民地教育史認識』社会評論社、2000年12月。

「魯迅が脱いだ服」(魯迅脱掉的衣裳)

『収穫』(上海)2000年4月号。

「理想家の黄昏」(理想家の黄昏)

『読書』(北京三聯書店)1999年3月号。

「アジアを語ること — そのジレンマ」(亜洲論述与歴史情境)

『読書』2000年2月号。

対談「「歴史に入る」方法」(溝口雄三氏と)(「関於「知識共同体、」」)

『開放時代』(広州)2001年11月号。

初出誌のうち、『読書』は、思想・学術・批評の全般に亙る中国を代表する雑誌のひとつで、欧米の現代思想や批評理論などの紹介の最先端を担い、知識層や学生などに大きな影響力を持つ。「知の共同体」運動にも関わった社会学者の黄平(ホァン・ピン)氏(中国社会科学院社会学研究所)らを代表的な編者とし、孫歌氏もその主要な執筆メンバーのひとりである。『収穫』誌は、むしろ伝統的な立場に拠るが、やはり中国を代表する文芸理論誌として著名である。なお、本書の刊行後、程なくして、訳者の一人である丸川哲史氏による著者へのインタビュー「東アジア 越境する知——孫歌著『アジアを語ることのジレンマ』の刊行を機に」が、書評紙の『週刊 読書人』第2451号(2002年8月30日号)に掲載された。本書成立の経緯などを含め、関心の向きには、併せて参看されたい。

さて、ここで本書の内容を概観するに先立ち、冒頭でも述べた本書の画期性やそれが有する象徴的な含意について、若干の考察を加えてみたい。

著者の孫歌氏の基本的な立場や方法論は、「アジアという思考空間」においても少しく示唆されているように、ポスト・モダン以降の現代思想の諸潮流などの影響下に成立した、いわゆるカルチュラル・スタディーズの手法や問題意識と一面で共振し、通底するものがある。しかるに、氏の姿勢や問題関心は、そうした西欧出自の議論の枠組を踏まえつつ、一方でそれを大きく超え出て、むしろ中国と日本を主な考察対象とする、東アジアの文化的伝統や近現代史の歩みのなかに測鉛を降ろし、自己の立脚地を照顧しようと試行する。一見、土着的なアジア主義とも見紛う、竹内好やタゴールへの傾倒と親炙、屈折した愛着の表明は、その辺りの消息を雄弁に物語っている。「理想家の黄昏」で引証される「人は他人から知識を借りることはできるが、他人から性格を借りてくるとはできない」とのタゴールの言葉は、きわめて暗示的である。

こうした一見したところ、二律背反とも見誤られかねない立場は、しかし、中国の思想界においても、また本書の日本への翻訳・紹介という文脈においても、むしろ積極的な意義を有している。

まず近年の中国の思想・学術の世界について言えば、改革・開放以後の知識界の一面での自由化、民主化や、欧米留学の一般化などとも相俟って、良くも悪しくも、日本以上に欧米偏重の思潮が著しい。これは、最近でこそ、そうした事態に徐々に変化の兆しが見えているとは言え、皮肉なことに、孫歌氏自身が関わった『読書』誌をはじめ、ポスト・コロニアル的なカルチュラル・スタディーズの領域において、広く中国・台湾・香港・韓国・日本などの論者が参加して創刊されたいくつかの媒体、たとえば台湾の陳光興(チェン・グワンシン)らを中心とする英文の『インター・アジア・カルチュラル・スタディーズ』、英語・中国語・韓国語・ドイツ語・日本語の五カ国語で公刊された『トレイシーズ』などにあっても、ほぼ同断である(因みに、中国における欧米の現代思

想の翻訳・紹介の概況については、『トレイシーズ』創刊号に掲載された、王曉明(ワン・シャオミン)「翻訳の政治学——八十年代中国大陆の翻訳活動」〔日本語版は拙訳による〕、2000年、が網羅的で参考になろう)。言うまでもなく、現代世界において、近代西欧の達成した、相応の普遍的価値を無視することは論外であるし、もとより評者は、安直なアジア回帰やいわゆる「アジア的価値」の称揚を意図している訳ではない。しかしながら、主としてこうした媒体を舞台に演じられる、欧米の方法論を用いてヨーロッパ中心主義を批判するという自己撞着にも似た逆説こそが、欧米流の価値観が世界的なヘゲモニーを握ってゆく過程の一環であると評することも出来ようし、アジア自身の伝統的な歴史的、文化的な価値から鍛え上げられた概念が驚くほど少ないことは、やはり問題であろう。孫歌氏の言葉を藉りるなら、現在の中国の知識界は、自らの「思想資源」を発掘し、良い意味でそれを批判的に継承してゆこうとする姿勢に、些か欠けていたと言わざるを得ない。なお、他方で、きわめて狭い範囲の専門家が、自国の歴史的、文化的伝統を、必ずしも同時代的な問題意識とは直結しない地点で研究するという事態は、当然のことながら現代中国にも一般的に見受けられ、一部での儒教再評価の動きなどは、経済的な自信の伸張と連動した大国主義の傾きさえ有しているが、孫歌氏の立場が、もとよりそうした思潮とも無縁なことは、もはや贅言するまでもあるまい。

次いで、本書を含む近年の孫歌氏の研究と思索の主な対象が、近現代の日本および日本の思想家へと向かっていることの意義もまた、見逃せない。日中両国の間には、本書の重要な主題となっているように、日中戦争をめぐる歴史認識の齟齬に起因する政治的、思想的な葛藤や相克があり、知識人と民衆とを問わず、中国側の日本への不信や蟠りには、簡単には解きほぐし難いものがある。加えて、やはり本書中にも示唆されているように、前述の欧米偏重的な思潮や、伝統的に根深い中華主義的な発想などとも関連して、狭義の日本研究の専門家を除く一般の中国の知識人が、日本の

「思想資源」に着目し、そこから自己に何がしか有益な示唆を抽出しようとする営為もまた、きわめて稀少である。その意味でも、日中両国の間は、非対称であり、不均衡であると言えることが出来る。翻って、日本の読書界においても、狭義の中国研究や政治・経済上の時事的な論説、若干の現代文学の紹介などを除いた、広い意味での中国の現代思想の翻訳・紹介は、近年、漸く緒に就いたばかりである。やはり専門的な学術誌上での抄訳的な紹介を除けば、本書は、金観濤・劉青峰著〔若林正丈・村田雄二郎訳〕『中国社会の超安定システム——「大一統」のメカニズム』(研文出版、1987年)、李澤厚著〔興膳宏他訳〕『中国の伝統美学』(平凡社、1995年)などに次いで、広く江湖に迎えられる要件を具えた現代中国の思想的論著として、特筆に値しよう。

以上のような状況を踏まえつつ、その問題性について、孫歌氏もまた、本書の「あとがき」のなかで、こう述べている。「中国の知の世界においては、『外部』を『内部』の思想与件として位置づける時、日本はこれまで長い間『外部』としての視野に入っていなかった。ある意味では、中国の知識人たちは日本の知識人よりも欧米向きかもしれない。特に八〇年代以来の中国において、新しい思想が形成され、蓄積される中でも、明らかに日本は依然として思想の資源とはなっていなかった。しかし、戦争という、日本ないし東アジアと絡み合う歴史を背負っている現代の中国人にとって、日本を除いては現代史が語れない、ということも事実である。実際には、日本は没原理的、あるいは没思想的な場においては、ずっと語られてきた。…(中略)…そういう意味で、日本は、私たちにとって近くて遠い存在となっていたのである。世代の交代によって、戦後の中国人の日本感覚は、「怨恨」から「無知」へ転じつつあり、その中間状態としての「無知にもとづいた怨恨」、あるいはそれと表裏した「無知にもとづいた賛美」という状況が、今日において、中国社会の日本認識の基調をなしている、と言ってよいであろう」(248～249頁)。更に続けて、「本書に収めた論文は、すべて、この状況を突破しようと意図して書

かれたものである。私の狙いは、無知と怨恨を解消することにあるのではなく、その無知と怨恨を問題化するところにある」と言う。南京大虐殺をめぐる日中間の歴史認識の齟齬を扱った「日中戦争——感情と記憶の構図」や「思想としての「東史郎現象」——理論と現実の間で」といった、すぐれて問題提起的な論攷が、まずはそれに該当しようが、むしろ彼女の思索の真骨頂は、たんに状況論的な文脈に終始するのではなく、それらが同時に、常により深く原理的な思考へと繋がっているところにある。

おそらく、そうしたより原理的で本質的な層面において、著者の思索は、多様性と複雑多義性を帯びたアジアを語ること、あるいはいま一度、語り直すことと、自らのアイデンティティーを掘り下げ、その主体形成を再考すること、という二点に複雑に絡まり合いながら集約する。そして、この二点こそが、すぐれて状況論的な考察の底流を貫く、思想的な主題、あるいは超学問的とも言える動機に他ならないだろう。

もとより、アジアを語することは、本書自体の書名が端的に示しているように複雑に屈折している。この問題系については、主として、冒頭の「アジアという思考空間」および本書の表題にも繋がる「アジアを語ること——そのジレンマ」の二編において集約的に考究される。無論、著者は、アジアなり、東洋なりという概念の曖昧さや複雑多義性、問題性に決して無自覚な訳ではない。その証左に、彼女は、「東洋」とは、まさに西洋によって建造された、またそのことによって徐々に自分自身を失いつつある新しい民族国家だ」というタゴールの冷徹な認識を引証している（「理想家の黄昏」、178頁）。言うまでもなく、アジアという呼称は、アジアの「他者」によって名指された、「非西洋」として表象するより他に、積極的な定義づけは不可能な概念でもある。孫歌氏もまた、「事実、アジアは私にとって、絶対に地域の名称を意味しない。またさらに、西洋に対抗する存在様態を意味しない」（31頁）、「アジア論述において、そのキーポイントは、それが西洋中心論に対抗する前提になり得るか否かにあるのではない」

(201頁)とさえ、宣告する。それでは、孫歌氏の語る「アジア」とは一体、何なのか？取り敢えずそれは、一面で氏が常に参照する、竹内好の言うところの「方法」的な概念、すなわち「方法としてのアジア」（『日本とアジア』、ちくま学芸文庫、1993年、所収、参看）に相似ることは言うまでもない。しかし、それがもはや「西洋に対抗する存在様態を意味しない」以上、竹内のような意義における「方法」概念とも、微妙な交差を見せる。敢えてそれを端的に言語化するなら、ある種の仮説的、機能的、構成的な概念、あるいはすぐれて実践的な概念とでも称することが可能かも知れない。

また、より現実的な問題としても、「アジア」を語る時のその語り口、更にそれが意味する文脈は、中国と日本、韓国などでそれぞれ微妙に異なる。「中国人のアジア観を考える際、私は、決して西洋の資源を参照の視点に使うということとはしなかった。アジア問題の提出から、アジア自身のアジア問題への回答に至るまで、実際には、それらは、西洋内部のアジア論述の変遷、及び東西間の力学関係から逃れることはできない。しかし、私は、もう一つの同じくらい重要な作業が蓄積されるべきだと信じている。それはつまり、アジア対西洋という構図の中で歴史的に形成された、アジア各国間の思想上の力関係を総括することである」（29頁）。それらは否応なく、地理的、地政学的な外在的要因によっても条件づけられている。「中国人の大国感覚が地理空間上の実体感を伴うものであるのに対して、韓国人や日本人の大国感覚には、そのような地理空間的な実体性は伴っていない。東アジアを議論する視角として、このような地理空間上の実体性は、軽視されるべきではないだろう」（188頁）という点も確認されている。その他、先述の丸川哲史氏のインタビューのなかでも、孫歌氏は、「南アジア、西アジアにも国土が繋がっている中国人にとっては、東アジアを語る必然性は日本と韓国ほどにはありません」「ですから別にアジアを語ることで正しい立場が保証されるというわけではありません」「逆に、だからといって東アジアを避けることも賢明ではあり

ません」などと、この辺りの複雑な事情を整理している。

そして、著者自身が、いわば学問的な「越境」を試みながら、自己の主體的なアイデンティティをまさに脱構築的に築いてきた道筋と、こうしたアジアを語ることの複雑さに直面することとが、深いところで通底し合うのである。この辺りの消息は、文字どおり複雑微妙であり、簡単には筆舌に尽くしがたいところでもある。また、この道程において孫歌氏は、欧米の現代思想の成果はもとより、より多くを魯迅や竹内好らの試行から学んでいる。そこで構成される主体とは、おそらく「他者」や「歴史」へと開かれ、またそれらに対して責任を担い得る主体、更には、曖昧さや多様性、複雑多義性をも許容する一種の開放系的な主体であろう。そうした新しい主体の在り方を、孫歌氏は、むしろ中国の広大で混沌とした歴史的な伝統や風土から、学び取ったように見受けられる。「私は、日本の思想史に接して始めて、中国の広大さとは一体何を意味するのかを考え始めた。それが意味するのは、何よりも流動や動乱を受け入れる能力のことであろう」(28頁)、「中国というこの構造の雑糅な文明のあり方に照らして言えば、その中心意識とは、自己と他者を区別するといった形態によるものではなく、反対に、自他を区別しない方法によってこそ体现される。中国人は、アジアを語らないが、それは韓国人がアジアを語らない歴史的コンテクストとは全く異なるものである」(198頁)。北京という都市を比喩的に表現した一節は、一面で、社会学者の費孝通(フェイ・シャオトン)らのいわゆる「中華民族多元一体」構造などを彷彿させもするが、同時に抗い難く、余りに美しい。「この元、明、清という三つの王朝、三つの民族の共同によって築かれた古い城市は、これまで「自己」の純粋性にいささかも拘泥したことがない。まさにこのために、それは、その市民に、個々に限られ各自に異なった自我を保持させ、限りなく豊富な同一性を共有させているのだ」(20頁)、「中国人は主体を開放する行為を通して主体形成を促すのである」、「北京のような、異なる民族、異なる王朝によって作られた古

都の混然たる精神風土は、「万世一系」という一本筋のイデオロギーを無意味にするだけでなく、それへの批判をも無意味にしている。北京の緩やかな包容力は主体性のもう一つの立て方を暗示している」(250頁)。

同時に、この新しいアイデンティティは、竹内好に代表される「日本の思想資源」からも多くの滋養を得ているのだが、「このアイデンティティは、私に無限の想像の余地を与え、新しい思考空間への踏み出しを可能にした。私にとっては、このような思考空間こそ、まさしく「アジア」なのだ」(30頁)、「アジアのアイデンティティは、ナショナルなアイデンティティと同様に、それが実体化の段階を越えた時、人と世界との関係を有効に変えてくれる」(31頁)とまで表現される。また、翻って「西洋の思想遺産に触れる有効な道筋」をむしろ「アジア意識」を獲得した後に発見した、ともいう。「アジア」概念は、ここでは、関係性を踏まえた一種の「空間感覚」とでも言えようか。それが未来へと向かうという意味においては、前述したように仮說的、構成的、あるいは実践的な概念であろうが、日本なり西洋なりの思想資源をも媒介としている点で、やはりそれは「方法」的な概念でもであろう。「この空間において、「日本」は、一つの方法として、実際に存在するものとしてよりは、その実体を越えた媒体として、私に自分の主体性を不断に鍛えさせ、樹立させようとしてくれる」(30頁)。ここで著者は、言うまでもなく、「日本」を「方法」や「媒体」として、中国なり自己自身なりの問題を反省的に考究している訳であるが、こうした姿勢は、かつて竹内好がまさに「中国」や魯迅を媒介とし、「方法」として、日本自身の問題を考察し、それを問題化したことと精確に対応している。竹内の「自分の国に問題を感じない人が中国へ行っても何も分からない」と述べたことなどが、想起される所以である。すなわち「外部」は多くの場合、「内部」の闘争における必要な与件としてはじめて意味づけられる」(248頁)という訳であり、著者によれば、「中国の知的世界における「外部＝内部」関係の実相を考え直し、自己認識を新たにしたい、これ

が私が自分に課した課題である」と定位される。

しかしながら、その際、「だからと言って、それによって私の「日本化」、またさらに「中国化」が増すということではない」とされ、翻って著者は、「事実、私は慎重に、その原理としては人々が知っているところの「トランスカルチャー」の可能性を体験しようとしているが、同時に、決して軽やかな「国際人」という陥穽に陥らないよう、時々刻々、自分を戒めている。思うに、それでこそ、私は「アジア人」たりうるのだ」(30～31頁)とも念を押す。それは、言うまでもなく、「国境を強調することと国境を単純に無化することのどちらもが、むしろ真の問題の回避に帰着してしまっている、というところにある」(201頁)からに他ならない。著者は、ナショナリズムや文化本質主義、更には文化本質主義批判の陥穽をも周到に回避しながら、ある種の「思考の抽象」に繋がりがねないトランスナショナルな「国際人」たることも拒絶する。その意味で、いわば土着主義ともまさに「紙一重」の地点で、自らの与件を脚下照顧し、それを掘り下げつつ、脱構築的に開かれた主体の形成へと赴く。より洗練されているとは言え、基本的に著者が、竹内好の思想的な正嫡子とも評し得る所以であろう。

我々は、幸いなことに、偶然にも「本物の日本籍の魯迅」(『魯迅が脱いだ服』)を持ち得たが、中国にあっては、残念ながら、先に示唆したような様々な要因から、これまで一人の竹内好をも生み出さなかった。そうした意味でも、孫歌氏の一連の思索の成果は、かかる非対称で不均衡な関係を些かでも解消し、日中両国の間で、真の異種交配による思想的営為やそれにもとづく連帯が新たに誕生しつつあることを告知するものと言えよう。また、今日もなお、「中国」という問題系が、日本人にとって、「他者」認識の試金石であり続け、その自画像や他者像を否応なく規定していることに鑑みるなら、著者の試みはまた、我々自身の思想的営為にとっても、大きな裨益を与え得るものに相違ない。

以上、本紙の性格や紙幅の都合などを考慮し、主として本書の画期性や著者の言う「アジア」な

る概念、更には、いわばアジア的な「主体」といった、より哲学的・原理的な側面に焦点を当てて、やや限定的な紹介を試みた。もとより本書の主題は、これに尽きるものではない。南京虐殺をめぐる記憶の問題を手掛かりに、歴史認識問題や歴史学における客観性、いわゆる「感情記憶」の問題などを提起した一連の状況論的な論攷、「日中戦争——感情と記憶の構図」や「思想としての「東史郎現象」——理論と現実の間で」などもまた、こうした原理的な思考を背景としつつ、アクチュアルな課題に対峙したものとして、一面でより以上に重要ですらあろう。しかるに、主にこの二論文については、評者は既に拙稿「「他者」の来歴、「現象」としての中国——状況論的、文脈的、そして、原理的に」(『現代思想』Vol.29-4, 2001年3月号、特集＝中華世界の行方)において、私見を交えつつ、概括的な論評を試みており、詳細は此方に譲りたい。併せて御参看願えれば幸いである。また、「近代史に向き合う倫理的責任」や「グローバリゼーションと文化的差異——国境を越えた知の状況に対する考察」、巻末に収められた溝口雄三氏との対談「「歴史に入る」方法——知の共同空間を求めて」において論及される、「知の共同体」と名付けられた運動には、評者も些か関わりを有した。これについても、かつて若干の紹介を行ったことがある(拙稿「明かしえぬ共同体、異交通の現場——日中・知の共同体」、『図書新聞』2513～2514号、2000年12月9日号・16日号)。また、更に『世界』誌上での孫歌氏との応答論文を含む、溝口雄三氏の近著『中国の衝撃』(東京大学出版会、2004年)も併せて参看されることが望まれる。

著者の孫歌氏の叙述は、一方で、現代思想の達成を自家薬籠中のものとして織り込み、社会科学的な認識力や洞察においても優れたものがあるが、同時に、歴史家としての感性や良い意味での文学的な陰翳や褻にも富んでいる(それは、前述の「魯迅が脱いだ服」、「理想家の黄昏」やランズマンのフィルム『SHOAH』に触れた『歴史を生き直すこと』などの批評的エッセーに特に明らかだ)。むしろ狭義の東アジアや日本の政治思想の

専門家以外の多くの読者によって、実際に繙かれることが期待される。折しも、日本においても、ここ数年来、優れたアジア論の論著が陸続と公刊されている。たとえば、澤井啓一『〈記号〉としての儒学』（光芒社、2000年）、山室信一『思想課題としてのアジア——基軸・連鎖・投企』（岩波書店、2001年）、子安宣邦『アジアはどう語られてきたか——近代日本のオリエンタリズム』（藤原書店、2003年）、古田博司『東アジア・イデオロギーを越えて』（新書館、2003年）といった書物とも、本書は交差する地点に位置していよう。本書が、より広汎で深い、様々な議論の呼び水となることを期待したい。

日韓交流国際シンポジウム

日 程：2004年7月18日～21日（会議は19、20
の2日間）

テーマ：西洋政治思想に対する20世紀日本と韓
国の対応

Japanese and Korean Responses to the
Western Political Thought in the 20th
Century

会 場：ソウル 梨花女子大学（LG Convention
Hall）

1 自由主義

本田逸夫（九州工大）：丸山眞男の自由主義論

洪 性敏（東亜大）：後期フォーコーにおける自
由主義批判の意味

ディスカッサント：金 鳳珍（北九州市立大）

2 民主主義

寺島俊穂（関西大）：戦後日本の民主主義思
想——市民政治理論の受容と展開

金 東洙（統一部、統一教育院）：民主主義と
民族主義の関連について

ディスカッサント：加藤 節（成蹊大）

3 社会主義

米原 謙（大阪大）：日本型社会民主主義の思
想——その展開と挫折

崔 致遠（高麗大、東アジア教育研究団）：
社会主義に現われた韓国近代性について

ディスカッサント：出原政雄（同志社大）

4 民族主義

加藤 節（成蹊大）：カント、フィヒテ、南原
繁——近代日本における民族主義の一位相

郭 峻赫（高麗大、アジア問題研究所）：親
日民族主義——李 光洙の民族独立論と皇
国的愛国心

ディスカッサント：李 静和（成蹊大）

5 国際秩序観

川田 稔（名古屋大）：戦間期政党政治の国
際秩序観

金 顯哲（高麗大、平和研究所）：日露戦争
と第一次世界戦争期における韓国知識人の国
際秩序観——戦争と平和についての認識を
中心に

ディスカッサント：金 鳳珍（北九州市立大）

CSPT 2004年度大会について

杉 田 敦 (法政大学)

2004年1月9日から11日にかけて、ルイジアナ州ニュー・オーリンズのテュレーン大学を会場として、CSPT大会が開催され、日本からは松本礼二会員と私が出席した。「欲望という名の電車」の舞台となったこの町では、Desire地区行きこそ廃止されたものの、路面電車が人々の足であり続けている。かつての栄華を偲ばせるコロニアル様式の住宅街を、ポポポポと音を立てる電車に乗って進んで行くのは、心はずむ一時であった。

今回テュレーンが会場として選ばれたのは、同所でアメリカ政治学会（APSA）の設立集會が開かれてから丁度百年にあたるのを機に、アメリカ政治学の一世紀を回顧するという趣旨であった。また、開催校の責任者であると同時に企画の中核を担ったマーティン・トンブソン氏には、アメリカ政治学と他の地域の政治学との関係について論じたいという強い意図があったと聞く。そのためもあって、今回は、（従来から深い関係にあるイギリスに加えて）オランダやドイツからの出席者が目立ち、これにわれわれ東洋からの参加者が加わるという構成になった。

きわめて多彩な発表のそれぞれに立ち入ることは能力を超えるので、全体の印象だけを申し上げると、ヨーロッパの参加者たちは、現在の自国の政治学がいかにアメリカ主導のものとなったかを強調しながら、もともとはヨーロッパが教師であったことを付け加えるのを忘れなかった。アメリカ側からも、これに呼応する形で、ヨーロッパの古い伝統がいかに多くを負っているかを確認する議論が多くなされた。両者のエール交換を前に、日本側としては、われわれがかつてヨーロッパのいかに良い生徒であったか、そして今はアメリカのいかに良い生徒になったかを力説するしかなかったが・・・。

いずれにしても、今回の大会を通じて、ヨーロッパ由来の政治学的伝統を共有する勢力の結集を

図ることで、何とか生き延びたいという「意志」のようなものが、私には感じられた。言うまでもなく、それは、「政治科学」が主流のアメリカ政治学界の中で周辺化されつつある、政治思想史家たちの危機感に根ざすものであろう。会の長老J.G.A.ポコック氏は、ギボン等に言及しながら、単純な法則などに還元できない人間の政治行動を論じるためには、歴史叙述の方法こそがすぐれていると論じていたが、これは、この会の方向性を示すものであったと言えよう。

折から日本では、いわゆる「大学改革」の流れの中で、政治学が置かれている状況は予断を許さないものとなっている。こうした中、オランダのレーニング氏が披露しておられた逸話を、ご参考までに、ここで紹介したい。オランダでも、大学評価の嵐が吹き荒れ、ついに同氏は、自らが設立に関わったA大学の政治学部を廃止するよう政府に求められた。他方、B大学では社会学部が廃止されることになった。そこで、A大学の政治学者を解雇する一方で、彼らがB大学の政治学部にも再雇用されるよう、彼は手を回した。他方、B大学の社会学者も解雇されたが、彼らはA大学の社会学部に収まることになったのである。めでたし、めでたし。

会場での議論もさることながら、多い時で40人ほどの小規模な会ただけに、さまざまな機会を通じて、多くの人と接触できたのは幸運であった。上述のポコック氏とも初めて言葉を交わし、故福田有広氏の仕事の意義などに関連して、お話をうかがえた。市民社会論の理論家として日本でも広く知られているアンドリュース・アレイトとジーン・コーエンの両氏とも会えた。今回アレイト氏は、東ヨーロッパなどでの民主的な政治体制づくりに関して、アメリカの憲法学や政治学の議論がいかに的はずれなものとなるかについて報告されたが、休憩時間には、アメリカの中東政策

や、マイケル・ウォルツァー氏の「正戦論」などについて彼と議論し、啓発されるところ大であった。

会の最後には、松本氏から、2006年に福岡で開催されるIPSA（世界政治学会）大会への参加を促すアナウンスメントがあったが、正直な松本氏が、「そのころ日本は雨期で、決して良い季節ではない」と述べた時、人々の顔が一様に曇ったように見えたのは、私の錯覚であろう。

以上、とりとめのない話ばかりで恐縮であるが、今後、わが政治思想学会とCSPTとの交流がより一層発展することを祈念しつつ筆を擱くことにする。

附記：参考までに同大会のプログラムを添付するが、実際にはいくつかの変更があった。例えば、日程の都合で中座したジーン・コーエン氏に代わって、アラン・ライアン氏がわれわれへのコメントーターを務めてくれた。

CSPT Annual International Conference on "SCIENCES OF POLITICS" January 9-11, 2004, Tulane University, New Orleans

Programme

Beginning : Friday, Jan. 9, 2004 at 9.30 a.m.

9.30 a.m. **Welcome : Dr. Lester Lefton** (Provost, Tulane University).
 Richard F. Teichgraeber (Director, Murphy Institute and CEPA, Tulane).
 Martyn P. Thompson (Tulane).

Section 1 : The Politics of Aristotelian and Anti-Aristotelian Sciences of Politics from Marsilius of Padua to Thomas Hobbes.

Session 1 : 10.00-12.00 a.m.

Chairs : Jaimey Fisher (Tulane) and **Martyn P. Thompson** (Tulane).

Papers :

Cary J. Nederman (Texas A&M), "Commerce and Community : Political Science Meets the Marketplace in the Thought of Marsiglio of Padua."

Michael Philipp (Augsburg), "The 'Politica' of 17th Century Germany as Reflected in the 'dissertationes politicae'. Some Aspects of the Older Tradition in Academic Political Science.

Michael Stolleis (Frankfurt), "The 'respublica mixta' in the 17th Century : on the Reception of the Ideal of a Mixed Constitution in Germany."

Comments : David Johnston (Columbia) and **Gary Remer** (Tulane).

Buffet Lunch : 12.00-1.30 p.m. Conference hall lobby.

Section 2 : The Politics of Political Economy and the Staatswissenschaften in the 17th and 18th Centuries.

Session 2 : 1.30-3.30 p.m.

Chair : Sharon Snowiss (Pitzer).

Papers :

James Moore (Concordia), "Natural Rights and Socinianism : Theological Foundations of Early Modern Politics from the Calvinist Theory of the Sovereignty of the People to Locke's Theory of the Judgment of the People."

J.G.A. Pocock (Johns Hopkins), "The Politics of Civil History : Crooked Timber and Enlightened Historiography."

Comment : Knud Haakonssen (Boston).

Coffee : 3.30-4.00 p.m.

Section 3 : The Politics of the 19th Century Social Sciences.

Session 3 : 4.00-6.00 p.m.

Chair : (Tulane)

Papers :

J. Christian Laursen (California, Riverside), "Law, Religion and Rights in Early Modern Political Theory : Cases from Germany (A.L. Schloezer and C.F. Bahrdt)."

Cheryl Welch (Simmons), "Social Science in Nineteenth-Century France : From Political Economy to Positivism."

Alan Ryan (Oxford), "J.S. Mill versus Violent Toryism of the Old School."

Comments : Jonathan M. Riley (Tulane).

Reception : 6.00-8.00 p.m. Howard Tilton Memorial Library, location of the foundation meeting of the American Political Science Association.

Saturday, Jan. 10, 2004

Section 4 : The Politics of American Political Science.

Session 4 : 9.00-10.45 a.m.

Chair : (Tulane).

Papers :

Dorothy Ross (Johns Hopkins), "Slavery, Race, and Nationalism in Nineteenth Century American Political Science."

Richard F. Teichgraeber III (Tulane), "Race and Academic Culture in 1903 : The 'Twin Conventions' in New Orleans and the Case of Professor bASSet."

Comments : Thomas S. Langston (Tulane).

Coffee : 10.45-11.15 a.m.

Session 5 : 11.15-1.00 p.m.

Chair : Jacqueline Berman (Tulane).

Nancy Maveety (Tulane), "The Vagaries of the Founding Field of the Discipline of Political Science."

Andrew Arato (New School), "Discourses of Institutional and Constitutional Design in Political Science and Legal Theory."

Comment : Tony Pereira (Tulane).

Buffet Lunch : 1.00-2.30 p.m. Conference hall lobby.

Section 5 : The Reception of American Political Science in Europe and Asia.

Session 6 : 2.30-4.30 p.m.

Chair : David Clinton (Tulane).

Papers :

Michael Brintnall (Exec. Director, APSA), "What are National Political Sciences and How do Ideas Diffuse Among Them? American Political Science and its Reception Elsewhere."

Tim Fuller (Colorado College), "Oakeshott's Critique of Political Science."

Comment : Ray Taras (Tulane) and Jerry Gaus (Tulane).

Dinner : No Arrangements.

Sunday, Jan. 11, 2004

Session 7 : 9.00-10.45 a.m.

Chair : Chad Lavin (Tulane).

Wilhelm Bleek (Bochum and Toronto), "Political Science in Modern Germany : An American Offspring?"

Percy Lehning (Rotterdam), "Political Science in the Netherlands."

Ron King (San Diego State), "American Political Science in Post-Communist Europe : the Case of Romania."

Comment : John Medearis (California, Riverside).

Coffee : 10.45-11.00 a.m.

Session 8 : 11.00-12.45 p.m.

Chair : Martyn P. Thompson (Tulane).

Reiji Matsumoto (Waseda), "Progressivism in Japan? American Influence on Postwar Japanese Political Science."

Atsushi Sugita (Hosei), "Cross-purposes : How Japanese Political Studies Encountered its American Counterpart."

Comment : Jean Cohen (Columbia).

Closing Remarks.

Walk to lunch at 344 Lowerline Street, New Orleans, LA. 70118.

MPT, December 21, 2003

第12回政治思想学会「自由論題」報告者募集のお知らせ

2005年5月の政治思想学会において、特定のテーマを設定せずに、若手研究者に報告の機会を与える「自由論題」のセッションを設ける予定です。つきましては下記の要領で報告者を募集しますので、ふるってご応募下さい。

政治思想学会「自由論題」企画担当：
藤原 孝（日本大学）

記

1. 報告者は応募の時点で学会員であることを要する。応募者が多数の場合には、博士論文執筆前後の若手研究者を優先する。
2. 応募に当っては、A4の用紙一枚に、氏名、所属、身分を明記の上、報告の題目を記入し、報告内容のレジュメ（概要）を約2000字（横書き）にまとめたもの3部を、2004年9月15日迄に、下記の藤原まで提出すること。
3. 企画担当は、レジュメを適切なレフリーの審査にかけた上で、10月の理事会で可否を決定し、その結果を応募者に通知する。
4. 報告者に選ばれた者は、2005年3月31日迄に、当該セッションの関係者に報告原稿をそれぞれ一部送らねばならない。
5. 報告時間は20分～25分を予定している。上記3の連絡の際に、あわせて確定した時間を通知するが、報告に際しては与えられた時間を厳守すること。
6. 内容によって、他のセッションに組み入れることがある。
7. 報告者は報告当日用のレジュメないし報告原稿（いずれの場合も参考文献を付すこと）を100部用意すること。
8. 応募時のレジュメ、報告原稿および報告当日のレジュメ類は返還されない。
9. この件に関する問い合わせ先は下記のとおり。

できるだけe-mailで問い合わせること。

宛先・問合せ先：

〒101-8375 千代田区三崎町2-3-1

日本大学法学部

藤原 孝

TEL: 03-5275-8686 FAX: 03-5275-8686

e-mail: ssmn@tkb.att.ne.jp

理事会議事録

2003年度第3回

2004年3月6日 成蹊大学

出席者：飯島昇藏、飯田泰三、小野紀明、加藤節、
亀嶋庸一、川崎修、権左武志、齋藤純一、関口正
司、添谷育志、千葉眞、萩原能久、平石直昭、藤
原孝、松本礼二、柳父圀近、山田央子、吉岡知哉、
米原謙、渡辺浩、和田守

1) 事務局の暫定的移転の件

加藤代表理事より福田有広会員の逝去に伴って
事務局を5月まで暫定的に成蹊大学亀嶋研究室に
移転したことにつき報告があった。

2) 日韓共同学術会議への追加補助の件

加藤代表理事より昨年7月に法政大学で開催さ
れた日韓共同学術会議に対し追加の補助として
118,200円を支出したとの報告があった。

3) 次期代表理事選出の件

昨年10月の理事会で承認された政治思想学会
代表理事選出規定にしたがって渡辺理事より小野
紀明理事1名が候補として推薦され全会一致によ
り次期代表理事に選出された。

4) 次期理事候補の件

加藤、佐々木、鷺見、和田の各理事4名が03
年度をもって退任することに伴い、次期理事候補
として新たに権左、山田の現監事2名の他数名が
推薦された。また次期監事候補として岡本仁宏、
富沢克の各会員2名が推薦された。なお代表理事
経験者の任期満了に伴う理事退任については規定
にある通り「原則として」であることが改めて確
認された。

5) 各種委員の件

『政治思想研究』の次期(第5号以降)編集委
員として川崎、関口、宮村、米原の各理事が継続

し平石理事が研究大会企画委員として編集委員に
加わり、米原理事が編集主任となることが承認さ
れた。

2004年度からの2年間のニューズレターの編
集については齋藤理事が担当することが承認され
た。

日韓学術交流については米原理事が引き続き担
当することが承認された。

事務局担当者については小野次期代表理事より
推薦してもらうことが承認された。

6) 2006年度の研究大会および企画委員の件

代表理事より、2005年度の開催校は日本大学
であることがすでに決定されているが、2006年
度の研究大会については福岡で開催されるIPSA
の中の政治思想関係のワークショップの企画を政
治思想学会が担当する形で行いたいとの提案があ
り了承された。また企画準備委員として川崎、松
本両理事が選ばれた。なお06年度研究大会の自
由論題については別会場で行う形で検討すること
が提案され了承された。

7) 学会設立10周年記念論文集の件

代表理事より学会設立10周年記念として2年
後に論文集を刊行すること、川崎、松本両理事を
企画編集委員とすることが提案され了承された。

8) 決算の件

代表理事より、前回の理事会で会計年度の始ま
りを3月始まりとすることになったが、福田会員
の急逝のため会計報告を行うための準備が現時点
では整っておらず、したがって03年度の決算報
告を従来どおり4月始まりの会計年度で行いたい
との提案があり了承された。

9) 『政治思想研究』第2号増刷の件

暫定事務担当の亀嶋理事より、『政治思想研究』

第2号の在庫不足を補うため同号を50部増刷したこと、その経費として約27万5000円を支出したことについて説明があり了承された。

10) 2004年度研究大会の件

2004年度研究大会の平石企画委員長より今回から大会報告者に報告原稿を2週間前までに提出するよう求める予定であること、また柳父開催校責任者より大会案内の印刷・発送を学会事務センターに依頼することについて報告があった。

11) 2004年度日韓共同学術交流の件

米原理事より、第3回日韓政治思想学会共同学術会議が今年の7月19、20日にソウルで開催されること、日本側の報告者として本田逸夫会員（報告テーマ：自由主義）、寺島俊穂会員（同：民主主義）、米原会員（同：社会主義）、加藤会員（同：民族主義）、川田会員（同：国際秩序観）の5名が参加することが報告された。

12) 新入会員の件

次の1名の入会が認められた。

船戸修一

13) 財団法人櫻田會出版助成の件

代表理事より、財団法人櫻田會からの『政治思想研究』刊行助成願いの担当を今後は藤原理事にお願いしたいとの提案があり了承された。

2003年度第4回

2004年5月29日 東北大学

出席者：岩岡中正、小野紀明、加藤節、亀嶋庸一、川崎修、菊池理夫、古賀敬太、権左武志、齋藤純一、関口正司、添谷育志、千葉眞、寺島俊穂、萩原能久、平石直昭、藤原孝、松本礼二、柳父圀近、山田央子、米原謙、渡辺浩

1) 新理事・新監事の選任

代表理事より、前回の理事会で推薦された理事・監事候補本人への意思確認の結果を踏まえた2004年度から2年間の理事・監事の陣容につき

報告があった。その内容は以下の通りである。

継続理事：飯島昇藏（早大） 飯田泰三（法政大）
岩岡中正（熊本大） 小野紀明（京大） 亀嶋庸一（成蹊大） 川崎修（立教大） 菊池理夫（松阪大）
古賀敬太（大阪国際大） 齋藤純一（早大） 佐藤正志（早大） 関口正司（九大） 添谷育志（明学大）
千葉眞（ICU） 寺島俊穂（関西大） 萩原能久（慶大） 平石直昭（東大） 藤原孝（日大） 松本礼二（早大） 宮村治雄（都立大） 柳父圀近（東北大）
吉岡知哉（立教大） 米原謙（阪大） 渡辺浩（東大）

新任理事：川田稔（名古屋大） 権左武志（北大）
杉田敦（法政大） 山田央子（青山学院大）

新任監事：岡本仁宏（関学大） 富沢克（同志社大）

2) 各種委員会報告

学会誌編集委員会主任の千葉理事より、第4号が刊行されたとの報告があった。その際、第4号の誤記の箇所について訂正文を次号およびニューズレターに掲載したいとの提案があり了承された。

05年度研究会企画委員長の松本理事より、「日本における西洋政治思想の受容」を研究会テーマとし、いくつかのセッションを企画中であることが報告された。また06年度のIPSAにおけるセッションの企画担当者の川崎理事より、目下具体的なテーマを企画中であることが報告された。また渡辺理事より同大会の報告に同時通訳をつけた方がよいのではないかと提案があり、会場設備および予算について検討する方向で了承された。

日韓政治思想学会共同学術会議担当の米原理事より、前回の理事会で紹介された報告者に加えて出原政雄、金鳳珍、李静和の各会員がディスカッサントとして参加するとの報告があった。

3) 決算報告

暫定事務局担当の亀嶋理事より別紙決算報告がなされ、ついで権左・山田両監事により会計監査報告がなされ、2003年度決算が承認された。

4) 2004年度予算案について

別紙2004年度予算案について、代表理事および事務局より説明があり、審議の結果、予算中の研究会開催費25万円を40万円に増額する修正案が承認された。これは、研究会開催に使用した教室等の使用料支払いのため経費が当初の予想より増額したことに対する支援措置である。

5) 新入会員の件

次の18名の入会が認められた。

上谷修一郎、川名雄一郎、小石川和永、呉 懷中、Wolfgang SCHWENTKER、高山裕二、田崎嗣人、田中智彦(再入会)、胆 紅、趙 曉靚、中田光雄、中村逸春、西田 浩、丸山正次、山本智弘、蔭山 宏、山本 卓、渡辺蓉一郎

2004年度第1回

2004年5月30日 東北大学

出席者：飯島昇藏、飯田泰三、岩岡中正、小野紀明、亀嶋庸一、川崎修、川田稔、齋藤純一、杉田敦、関口正司、添谷育志、千葉眞、寺島俊穂、萩原能久、平石直昭、藤原孝、松本礼二、柳父圀近、吉岡知哉、米原謙、渡辺浩、岡本仁宏、富沢克、堀田新五郎(事務局)

1) 新理事・新監事の紹介

小野新代表理事より、新理事・新監事の紹介が行われた。

2) 事務局移転の件

成蹊大学亀嶋研究室から奈良県立大学堀田研究室へと事務局が移転することについて説明され、了承された。

3) 入会申し込みの件

昨日2003年度第4回理事会で提起された問題、すなわち入会申込書がまず学会事務センターに送られ、その後事務局へと回送される手続きではタイムラグが発生し、理事会での承認に支障をきたすという事態を考慮して、以前通り入会希望者は

まず事務局に申し込むという手続きに戻すことが提案され、承認された。また今後は、研究会当日の受付にも、入会申込書を用意する旨が確認された。

4) 会計年度の件

2003年度に会計年度を変更し3月1日はじまりとする案が承認されたが、4月はじまりでも特に問題なしとの判断から、従来通り4月1日はじまりとすることが提案され、了承された。

5) 会員名簿更新の件

今年度は会員名簿更新の年であることが確認され、記載する項目等について議論が交わされた。基本作業を担当する学会事務センターが、現在の記載データを各会員に送付し、変更点および各項目についての公開・非公開のチェックを入れていく基本方式が承認された。

6) 研究会「自由論題」について

研究会「自由論題」の時間配分等について議論が交わされ、今後若手会員の報告がより充実したものになるべく司会を中心に工夫すべきことが確認された。

会 務 報 告

政治思想学会 2003 年度会計報告書*

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	4,412,420	研究会開催費	250,000
補助金（櫻田會）	1,000,000	海外報告者招聘費	100,000
会費	2,290,570	日韓共同学会議	118,200
学会誌売上金	103,950	業務委託費	1,002,400 **
		学会誌費	1,465,732 ***
		事務局費	39,457
		会報費	217,350
		支出合計	3,193,139
		繰越金	4,613,801
	7,806,940		7,806,940
		資産内訳	
		センター預り金	771,282
		現金	5,123
		郵便貯金	957,396
		郵便振替口座	2,880,000
		計	4,613,801
			(単位：円)

* 本会計年度は2003年4月1日より2004年3月31日までである。

** 業務委託費のうち通信費、コピー代、印刷費などの実費請求分を差し引いた委託手数料は513,408円である。

*** 学会誌費のうち第2号増刷経費および第4号編集経費を差し引いた第3号印刷製本経費は1,114,575円である。

政治思想学会 2004 年度予算案

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	4,613,801	研究会開催費	400,000
補助金（櫻田會）	1,000,000	業務委託費	1,000,000
会費	2,150,000	学会誌費	1,200,000
学会誌売上金	50,000	事務局費	80,000
研究会参加費	5,000	会報費	300,000
		小計	2,980,000
		予備費	4,838,801
	7,818,801		7,818,801
			(単位：円)

事務局よりのお知らせ

・上記理事会議事録にありますように、事務局は奈良県立大学堀田研究室に移転致しました。今後、入会申込書については、下記住所までお送り下さいますようお願い致します。

・また、これも議事録にありましたように、本年度は会員名簿更新の年です。会員各位のもとに、学会事務センターより名簿更新に関する問い合わせが送られて来ますので、ご協力のほど、お願い致します。

新事務局：奈良県立大学地域創造学部 堀田研究室

住所) 〒630-8258 奈良市船橋町10

TEL) 0742-22-4978 Fax) 0742-22-4991

E-mail hotta@narapu.ac.jp

お詫びと訂正のお願い

『政治思想研究』第4号は5月に刊行されました。会員の多くの方々のご協力とご尽力を感謝いたします。さて申し訳ございませんが、以下のような誤記がありました。

1) 執筆者紹介欄 (229頁)

高橋和則会員の地位について 誤→専任講師 正→兼任講師

2) 表紙裏 年報刊行委員会

田中委員の名前について 誤→田中浩男 正→田中治男

3) 裏表紙 Contents

半澤孝麿会員の名前の英文表記について 誤→Hidemaro 正→Takamaro

以上につきまして、謹んで訂正をお願いいたしますとともに、お詫びを申し上げます。

第4号編集主任 千葉 眞

2004年7月20日発行 発行人 小野 紀明 編集人 亀嶋 庸一

政治思想学会事務局 〒630-8258 奈良市船橋町10 奈良県立大学地域創造学部 堀田研究室内

Tel: 0742-22-4978 Fax: 0742-22-4991 E-mail: hotta@narapu.ac.jp

会員業務（会費納入・名簿記載変更事項・会報発送・学会誌発送販売）

（財）日本学会事務センター政治思想学会係 〒113-8622 東京都文京区本駒込5-16-9

Tel: 03-5814-5800 Fax: 03-5814-5825

学会ホームページ: <http://www.soc.nii.ac.jp/jcspt/>